

群馬県前橋市

前山Ⅱ遺跡

発掘調査報告書

1990

前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団



はじめに

前山Ⅱ遺跡が所在する群馬県前橋市は、北に名山赤城山を望み坂東太郎として名高い利根川や市民の憩いの場となっている詩情豊かな広瀬川が市街地を流れる水と緑の美しい県都です。

このように豊かな自然に恵まれた市域には、今から2万年以上前の旧石器時代から近世に至るまでの多くの遺跡が地下に眠っています。特に古墳時代においては、上毛野氏の本拠地として市域には、その数800基といわれる大小の古墳が造られ東国を中心として栄えました。

奈良・平安時代に至ると上野國は大国と称され国府が現在の元総社町におかれ、上野國分寺・國分尼寺なども建立され、上野國の政治・経済・文化の中心地として発展してきました。

中世においては、戦乱と信仰にかかる城砦などの遺跡や各種石造物などの遺物が数多く残されています。また、近世に至ると川越・忍とならび関東三名城の一つとして知られる鹿橋城が築かれ、譜代大名の酒井氏が藩政を執り行いました。

このように、前橋の地は豊かな自然とともに長い歴史に培われて発展してきたのであります。

今後も各種開発事業に伴う発掘調査により、さらに本市の歴史の空白部分が解明されていくものと確信しております。

このたび、前橋工業団地造成組合より泉沢工業団地造成に伴う埋蔵文化財確認調査依頼があり調査を実施しましたところ、小規模ではありますが平安時代の集落跡が発見され、本調査をすることに至りました。調査の結果平安時代の住居跡4軒と縄文時代の土1基及び平安時代以前のものと思われる溝1条を確認いたしました。本遺跡の北側は昭和61年7月に前山遺跡として縄文時代の土7基と古墳へ奈良・平安時代のものと推される溝4条が調査されており、今回の調査で台地の先端部には平安時代の小規模集落が存在することが分かり、前山遺跡の調査で不明であった部分が解明され貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、本報告書を刊行するにあたり、物心両面から援助、協力をいただきました前橋工業団地造成組合、また発掘作業に従事していただきました方々に対し厚くお礼申し上げます。

本報告書が荒砥地区の歴史を解明する一助となり、また考古学研究の参考になれば幸いに存じます。

平成2年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 二瓶益巳

例　　言

- この報告書は、工業団地造成予定内（前橋市泉沢町1256-1番地他）における埋蔵文化財発掘調査に関するものである。
- 本遺跡の名称は、旧地籍名を用いて前山とし、昭和61年に調査した「前山遺跡」に引き続く発掘調査のため「前山Ⅱ遺跡」とした。
- 現地調査は前橋市埋蔵文化財発掘調査・前橋市教育委員会の指導のもとに山武考古学研究所が担当した。また、調査の実施にあたっては前橋工業団地造成組合に費用及び協力を得た。
- 本遺跡の現地調査は、平成元年9月4日から同年9月25日まで遺構の有無を調べる確認調査を行ない、その成果に基づいて本調査を平成元年9月26日から同年10月9日まで行なった。
- 本書の作成は遠藤和夫、安藤社夫、石塚三夫、近江屋成陽があたり、全体の討議をもとに分担執筆し、文責を文末に記した。また、総括は平岡和夫が行ない、資料整理にあたって根本時子、石井百々子、相京清子の協力を得た。
- 第1図は建設省国土地理院作成の2万5千分の1『大胡』の地形図を用いた。
- 本遺跡の出土遺物及び発掘調査にかかる資料は前橋市教育委員会に保管してある。
- 土器の墨書きの判読及び撮影については平川南氏（国立歴史民俗博物館）にお願いした。また、本書の作成にあたり、松田猛氏（群馬県史編さん室）より御教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

目　　次

はじめに

例　　言

I. 調査に至る経緯	1	
II. 調査の組織	1	
III. 遺跡の位置と環境	3	
IV. 調査の経過	4	
V. 調査の方法	6	
VI. 遺構と遺物	7	
1. 穫穴式住居址とその遺物	2. その他の遺構	3. 調査区内の遺物
VII. まとめ	19	

I. 調査に至る経緯

- 昭和60年11月 前橋工業団地造成組合より第1次の開発事業計画が提出される。
〃 市教委社会教育課文化財保護係員により分布調査実施。
- 昭和60年12月 試掘調査の必要有りの回答をする。
- 昭和61年4月 前橋工業団地造成組合より調査依頼が提出される。
- 5月 発掘調査の委託契約を結ぶ。
- 6月～7月 範囲確認調査を実施する。
- 7月～9月 発掘調査を実施する。
- 10月 前山遺跡発掘調査報告書刊行。
- 昭和63年11月 第2次開発事業計画が提出される。(泉沢工業団地造成)
- 12月 発掘調査の必要有りと回答する。
- 平成元年4月 前橋工業団地造成組合より発掘調査依頼が提出される。
- 9月 範囲確認調査を実施する。
- 10月 部分的に本調査を実施する。
- 平成2年2月 報告書刊行のための整理に入る。
- 平成2年3月 前山Ⅱ遺跡発掘調査報告書刊行。
- 昭和61年度の発掘調査は、教育施設建設にかかるもので、校舎建築部分のみが対象であったが、今回の調査は工業団地造成のためのもので、前回調査の際に対象外となっていた部分を調査したものである。

(遠藤 和夫)

II. 調査の組織

- 団長 二瓶 益巳 (前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長)
調査指導 遠藤 和夫 (前橋市教育委員会 社会教育課文化財保護係主任)
平岡 和夫 (山武考古学研究所 所長)
調査担当 安藤 杜夫 (山武考古学研究所 資料室係長)

発掘調査参加者

飯嶋 実 飯島 民弥 石田 いつ 久保田 海一郎
小屋たみ子 斎藤 重美 坂牧 光枝 烏山 初子
星野 ふじ



第1図 前山II遺跡と周辺の遺跡

III. 遺跡の位置と環境

前山遺跡は赤城山南麓にあたる前橋市泉沢町1256-1番地他に所在し、市街地から東へ約7.5kmの位置にある。本遺跡の立地する赤城山南麓の基盤層は火山泥流堆積物によって形成されており、周辺地域の地表面は下部ローム以上を堆積する洪積台地と、ロームの二次堆積である砂壌土性の微高地、及び宮川によって形成された冲積地とで成り立っている。宮川は旧利根川の第三次支川で、荒砥川に合流した後に旧利根川筋の桃ノ木川から現利根川へ流下する。現在では、水田灌漑のために中流域で「深堀」と称する用水に接続されて他地域から水補給が行われている。

周辺では先土器時代から近世に至るまでの多くの遺跡が発掘調査されており、ここで時代別に本地域の遺跡分布を概観してみたい。

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	概要	No.	遺跡名	概要
1	前山Ⅱ遺跡	平安集落・溝	26	東原遺跡	縄文前期住居・古墳後期集落・奈良・平安住居
2	前山遺跡	縄文前期包含層・陥入穴・溝	27	宮下遺跡	弥生後期住居・古墳後期集落・奈良・平安集落
3	山ノ上・茂木塙	箱式石棺石室	28	荒砥源訪西遺跡	古墳前期・後期集落・奈良・平安住居・C軸石に係わる扇・B軸石下水田址
4	谷津遺跡	縄文聚落・古墳群・奈良・平安集落	29	荒砥源訪遺跡	縄文中期包含層・古墳時代周溝墓
5	上横後古墳群		30	荒砥宮田遺跡	縄文前期住居・古墳前期・中期・後期集落・奈良・平安集落・B軸石下水田址
6	山崎遺跡	縄文	31	頭無遺跡	弥生中期住居・古墳後期集落・平安集落
7	寺東遺跡	古墳中期集落・溝	32	荒砥下押切遺跡	古墳後期集落・奈良・平安集落
8	寺前遺跡	古墳中期集落・井戸・溝	33	荒砥中屋敷遺跡	古墳後期集落・平安集落
9	三屋遺跡	先土器	34	荒砥保育所遺跡	古墳時代後期住居
10	荒砥355号墳	前方後円墳	35	阿久山古墳群	
11	七ツ石遺跡	弥生後期集落・古墳群	36	荒砥前田遺跡	B軸石下水田・荒砥川の洪水下の水田址
12	東前田北遺跡	古墳中期集落・中世塚・溝	37	荒砥大日塚遺跡	弥生住居・古墳後期集落・B軸石下水田址
13	東原西遺跡	古墳中期集落・溝	38	荒口前原遺跡	弥生中期・後期初頭住居・平安住居
14	丸山遺跡	縄文陥入穴・古墳・奈良・平安集落	39	立野古墳群	
15	新山遺跡	古墳群・方形周溝墓・溝	40	丸山古墳群	
16	上西原遺跡	基壇を有する柱穴列と溝・奈良・平安集落	41	荒砥荒子遺跡	古墳中期の権を伴う住居・後期集落・奈良・平安集落
17	伊勢山古墳群	前方後円墳・円墳10基	42	鷲谷遺跡群	縄文前期・中期の住居・縄文草創期散布地・奈良・平安集落
18	中島古墳群		43	荒砥北原遺跡	縄文前期・中期の住居・縄文草創期散布地・奈良・平安集落
19	黒子小学校庭遺跡	古墳後期集落・奈良集落・須恵器窯跡	44	荒砥北三木堂遺跡	先土器・縄文草創期散布地・弥生住居・古墳前期・後期集落
20	川篠皆戸遺跡	奈良・平安住居	45	荒砥大日塚遺跡	古墳後期集落・奈良・平安集落
21	堤東遺跡	奈良集落	46	荒砥上之坊遺跡	縄文前期住居・弥生後期住居・古墳前期集落・奈良・平安集落・品
22	柳久保遺跡	古墳集落・奈良集落	47	北三木堂古墳群	
23	大久保遺跡	奈良・平安集落	48	大日遺跡群	古墳後期・奈良・平安集落・水田址
24	柳久保遺跡群	先土器・縄文早期包含層・古墳中期集落	49	今井神社古墳群	前方後円墳・円墳27基
25	東原古墳群				

先土器時代は、柳久保遺跡、三屋遺跡、北三木堂遺跡で、尖頭器などが出土している。今後 の発掘調査によって遺跡数が増えると考えられる。

繩文時代は、草創期が荒砥北原遺跡、北三木堂遺跡、早期が柳久保遺跡・荒砥北原遺跡、前期が下鶴谷遺跡・荒砥宮田遺跡・東原遺跡・鶴谷遺跡、中期が荒砥諏訪遺跡・荒砥北原遺跡、後期が島原遺跡・荒砥上川久保遺跡が知られている。晩期の遺跡はまだ発見されていない。

弥生時代は、中期が島原遺跡・頭無遺跡・荒口前原遺跡、後期は宮下遺跡・七ツ石遺跡が知られている。

古墳時代は前期から急激に遺跡数が増加する。前期は荒砥宮田遺跡・荒砥上之坊遺跡の集落址、他に荒砥前原遺跡・荒砥諏訪遺跡・堤東遺跡などで方形周溝墓群が知られている。中期は柳久保遺跡などの集落址、他に荒砥荒子遺跡・丸山遺跡で豪族居館址が発見されている。後期は山ノ上古墳・茂木古墳・今井神社古墳など数多くの古墳が築造され、群集墳を形成するようになり、県下有数の古墳密集地帯を形成している。

奈良・平安時代になると、近隣の台地上には数多くの集落が営まれるようになり、普遍的に人々の生活を支える水田址も発見例が増加している。集落址は下鶴谷遺跡・頭無遺跡などが知られ、浅間B軽石によって埋没した水田址は、柳久保水田址などが知られている。また上西原遺跡では郡衙とみられる基壇を有した柱穴列と溝が発見されている。

中世では、大室城・今井城などの城郭址が知られている。

(石塚 三夫)

IV. 調査の経過

確認調査(平成元年9月4日～同年9月25日)

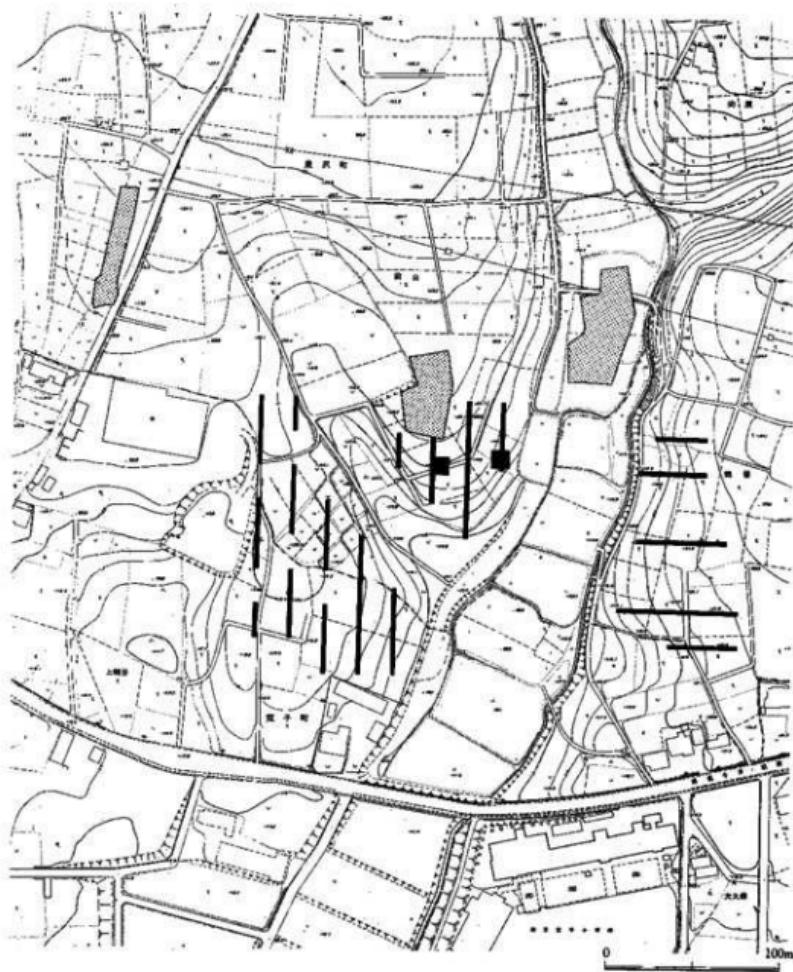
- 9月4日 現地にて前橋市教育委員会の立ち合いのもとに調査区の確認と試掘トレンチの設定を行ない、発掘前の現況を写真撮影した。
- 9月5日 各トレンチ内に2m×2mの小グリッドを設定し試掘した。遺物の有無及び遺構の確認面に至る層序を確認した。
- 9月7日 東側台地、南端部13トレンチより重機にて発掘調査を開始する。
- 9月11日 トレンチ内の精査終了。4トレンチ、7トレンチ、12トレンチの堆積状態の断面図を作成する。

本調査(平成元年9月26日～同年10月9日)

- 9月26日～9月30日 8トレンチによって確認した竪穴住居址の調査1(A)、3(A)4・5トレンチによって確認した溝状遺構の調査。
- 10月1日 6トレンチによって確認した竪穴住居址の調査開始。各トレンチ調査の終了状態を写真撮影する。

10月4日 6トレンチによって検出された竪穴式住居址部分を10m×10m拡張し、精査の結果、3軒の重複が確認された。

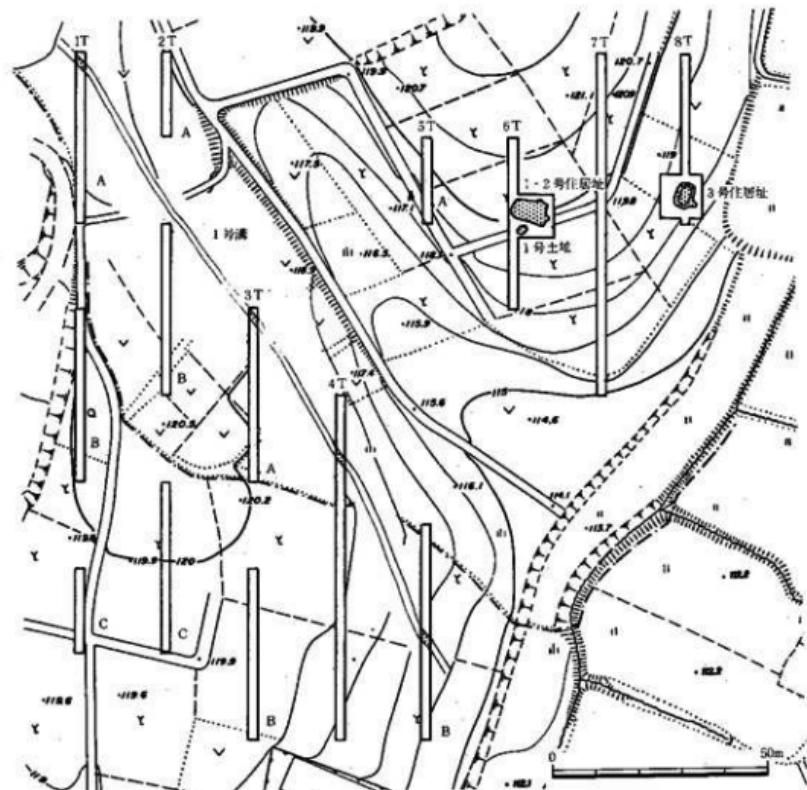
10月9日 6トレンチによって検出された竪穴式住居址の調査終了。遺跡全体及び遠景の写真撮影。発掘機材等を撤去して全ての調査を終了した。 (安藤 杜夫)



第2図 前山・前山II遺跡の調査区域図

V. 調査の方法

今回調査対象になった地区内に、前橋工業団地組合が、東、西、南、北、公共座標に沿って20m間隔の杭打ちをすでに行なっていた関係上、その杭に沿って、中央部の谷部を挟み西側台地に対しては南北方向へ、東側台地に対しては東西方向へトレンチを設定した。トレンチ番号は西側台地西端より東方へ1(A、B、C)トレンチ、2(A、B、C)トレンチ～8トレンチとし、東側台地北端より南方向へ9トレンチ～13トレンチとし、トレンチ方を用いて行なった。トレンチ巾は2m、調査対象面積の5%を確認した。重機による表土排除後、精査の結果検出された遺構のうち住居址に関しては、その全貌が出るまで拡張し、溝に関してはトレンチ内ののみの発掘調査で全体のつながりを判断した。実測図面は遺構平面、断面に関しては縮尺1/20、住居址内カマドは縮尺1/10で作成し、トレンチ断面図は縮尺1/20で作成した。(安藤 杜夫)



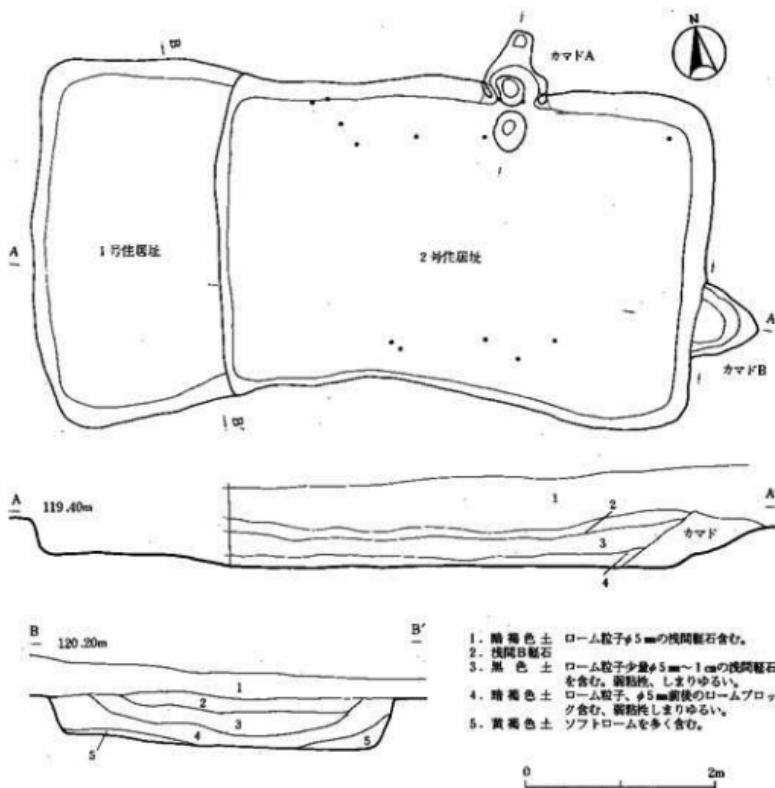
第3図 前山II遺跡の遺構配置図

VII. 遺構と遺物

1. 積穴式住居址とその遺物

1号住居址（第4図、図版4）

6トレンチで確認した住居址である。舌状に南側へ突出した台地の先端部に位置し、西側を半分以上も2号住居址によって隣されている。平面形は方形で、東辺が3.40m、壁高は50cmを計る。床面は硬質ローム層中に敷かれ、やや南側に傾斜している。出土遺物は無く、住居址として扱うには疑問であるが、床面に踏み固めが認められたため、本報告ではこの積穴を住居址とした。



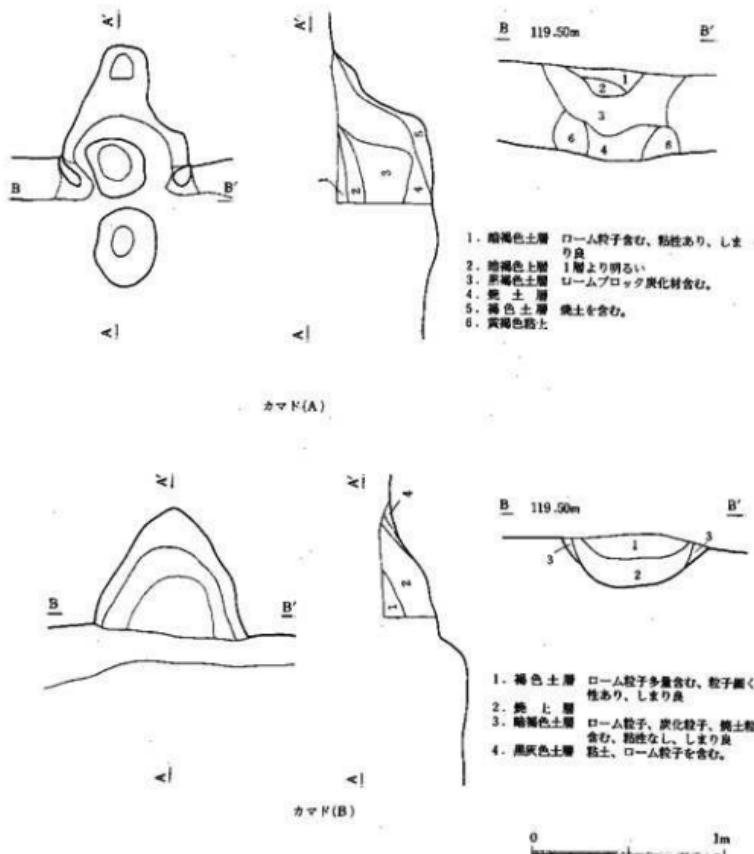
第4図 1・2号住居址

2号住居址（第4・5・6・7図、図版4・7）

6トレンチで確認した竪穴式住居址である。舌状に南側へ突出した台地の先端部に位置し、東側で1号住居址と重複関係にある。新旧関係は本址の方が新しくなる。

平面形はやや歪な長方形で、北辺が5.10m、東辺が3.40mを計る。壁高は東壁で50cm、北壁で38cm、南壁で46cmである。床面は軟質ローム層中に敷かれ、ほぼ平坦な面となっている。カマド（A）前から中央部にかけて踏み固めが認められた。柱穴やピットは全く検出できなかった。また隕溝も検出されなかった。

カマドは2基検出され、北壁中央やや東寄りに付設されたカマドを（A）、東壁中央やや南



第5図 2号住居址のカマド

寄りに付設されたカマドを（B）とした。カマド（A）は壁をU字状に大きく切り込み、煙道は段を有して立ち上がる。燃焼部の大半が壁外に在り、火床面もよく焼けている。また、焚口部は少し掘り窪められ、構築材には黄褐色粘土が用いられ、芯には平瓦が利用されている。カマド（B）は本址廃絶時には壊され使用されていなかったようで、袖部も火床部も確認できなかった。煙道は壁をV字形に大きく切り込み、小さな段を有して立ち上がる。

2号住居址の遺物（第6・7図、図版7）

本址からの出土総量は大型整理箱2箱で、その大半は本址に伴うものと考える。遺物は全体に散在しており、これといった集中箇所は観られない。土師器と須恵器の割合は3:2で土師器が多く、土師器坏は全て体部に指頭圧痕を残す非ロクロのものである。

1は土師器坏である。口径11.7cm、器高3.3cm、底径8.9cmを計る。焼成は良好、胎土は砂粒を含む。色調は茶褐色、内面ナデ底部外面へラケズリ、底部外面に「口火」と墨書きしている。

2は土師坏の完形品である。口径11.4cm、器高3.6cm、底径9.1cmを計る。焼成は良好。胎土は砂粒を含む。色調は褐色。底部外面から体部下端にかけてヘラケズリ。底部外面に「車」「東院」と墨書き、内面に「車」と墨書が施されている。

3は土師器坏である。口径11.9cm、底径8.0cm、器高は2.95cmを計る。胎土は砂粒を含む。焼成は良好。色調は茶褐色を呈する。底部から体部下端にかけて範削りで調整している。

4は土師器坏である。口径12.9cm、底径は7.4cm、器高2.80cmを計る。胎土は砂粒を含む。焼成は良好。色調は茶褐色を呈する。体部下半は指頭による押さえ、底部はヘラケズリで調整している。

5は須恵器坏の完形品である。口径13.3cm、底径7.1cm、器高は3.1cmを計る。胎土は黒色粒を含む。焼成は還元、色調は灰褐色を呈する。右回転ロクロ成形で回転糸切り未調整である。

6は須恵器坏である。底径7.2cm。底部1/4残存。残存高1.5cmを計る。胎土は石英粒を含む。焼成は還元。

7は須恵器杯である。底径6.4cm。底部1/4残存。残存高2.1cmを計る。胎土は細かい砂粒を含んでいる。色調は灰白色を呈する。回転糸切り無調整である。

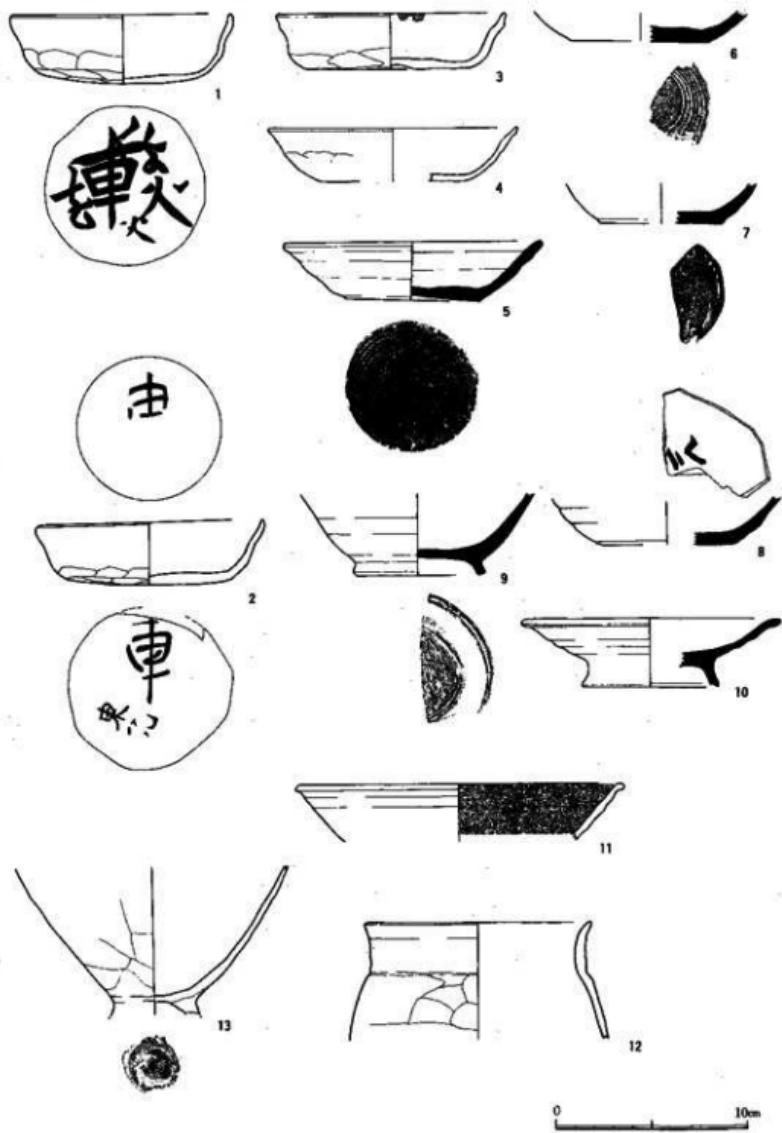
8は須恵器坏である。底部破片1/3残存。底径7.4cmを計る。焼成は還元、胎土は砂粒を含む。色調淡灰色、ロクロ成形後回転糸切り無調整底部内面に墨痕あり。

9は須恵器高台付杯である。底部1/3残存、底径6.3cm、残存高4.3cm、胎土小石粒を含む。焼成還元。色調は淡灰色。右回転ロクロ成形。

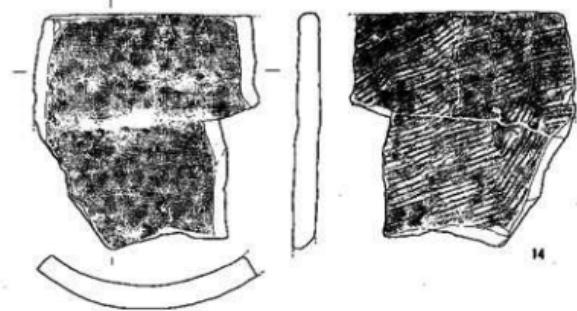
10は須恵器高台付皿である。1/3の残存。口径13.5cm、底径7.2cm、残存高3.6cmを計る。胎土は砂粒を含む。焼成は還元軟質。色調は灰白色。ロクロ成形。

11は灰釉陶器壺である。口径は16.8cm、残存高3.0cm、口縁部1/4の残存。胎土に砂粒を含む。焼成良好。色調灰色を呈する。内部に釉がかかる。

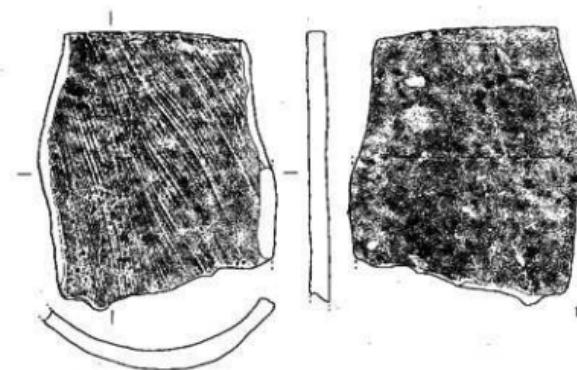
12は土師器甕である。口縁部破片。口径11.7cm。口縁部1/2残存高6.2cmを計る。胎土に砂粒を含む。焼成は良好。色調は茶褐色。調整は口縁内外へラナデ、胴部外面へラケズリ、内面へ



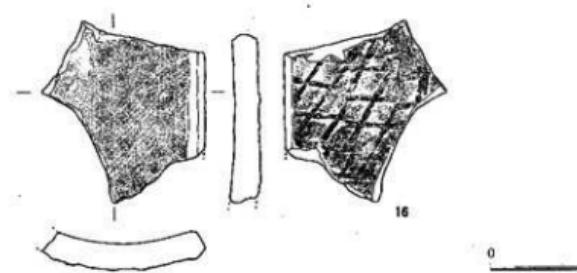
第6図 2号住居址の遺物(1)



14



15



16

0 10cm

第7図 2号住居址の遺物(2)

ラナデで調整している。

13は土師器台付甕である。底部破片。底径2.5cmを計る。残存高7.8cm。胎土に砂粒を含む。焼成は良好。色調は茶褐色。調整は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデで調整している。

14~16はいずれも平瓦で、焼成は良好、胎土に小石・砂粒を含む。色調は14が灰色、15・16は茶褐色である。14は凸面に平行叩きを施し、16は大きい斜格子状の叩きを施す。凹面はいずれも布目裏を残す。

3号住居址（第8図、図版5）

8トレンチで確認した住居址である。舌状に南側へ突出した台地の南東側緩斜面に立地し、他遺構との重複はないが、斜面の勾配のために東側がだいぶ崩壊流失している。

平面形は長方形で、規模は4.48×3.17mである。壁はやや勾配をもって立ち上がり、壁高は確認面である軟質ローム層上面まで最大で61cmを計る。壁溝、柱穴は認められなかった。床面は硬質ローム層中に敷かれ、やや中央部が窪むもののほぼ平坦な面となっている。また、カマド前から中央部にかけて踏み固めとみられる堅密な範囲を認めた。

カマドは東壁中央やや南寄りに付設されている。煙道部は壁外に長く突出しており、燃焼部の一部も壁外に存在する。構築材には黄褐色粘土が用いられているが、崩壊流失が著しく、天井部、袖部は確認できなかった。火床部は地山を若干掘り窪めて造られているが、あまり火熱は受けていない。また、火床部のすぐ西側に細かい炭化粒の拡がりを確認した。この範囲が焚き口部と考えられる。

3号住居址の遺物（第9~11図、図版8）

本址からの出土総量は大形整理箱3箱で、その大半は本址に伴うものと考える。遺物はカマド内とその前面に集中している。土師器と須恵器の割合は2:1で土師器が多く、土師器杯は体部に指頭圧痕を残す非口クロのものである。

1~4は土師器甕で、いずれも器肉は薄く、口縁部はコの字状を呈する。1・2の口唇部はつまみ上げられ、肩部から縦方向のヘラケズリが施されている。いずれも焼成は良好で、胎土に小石・砂粒を含む。

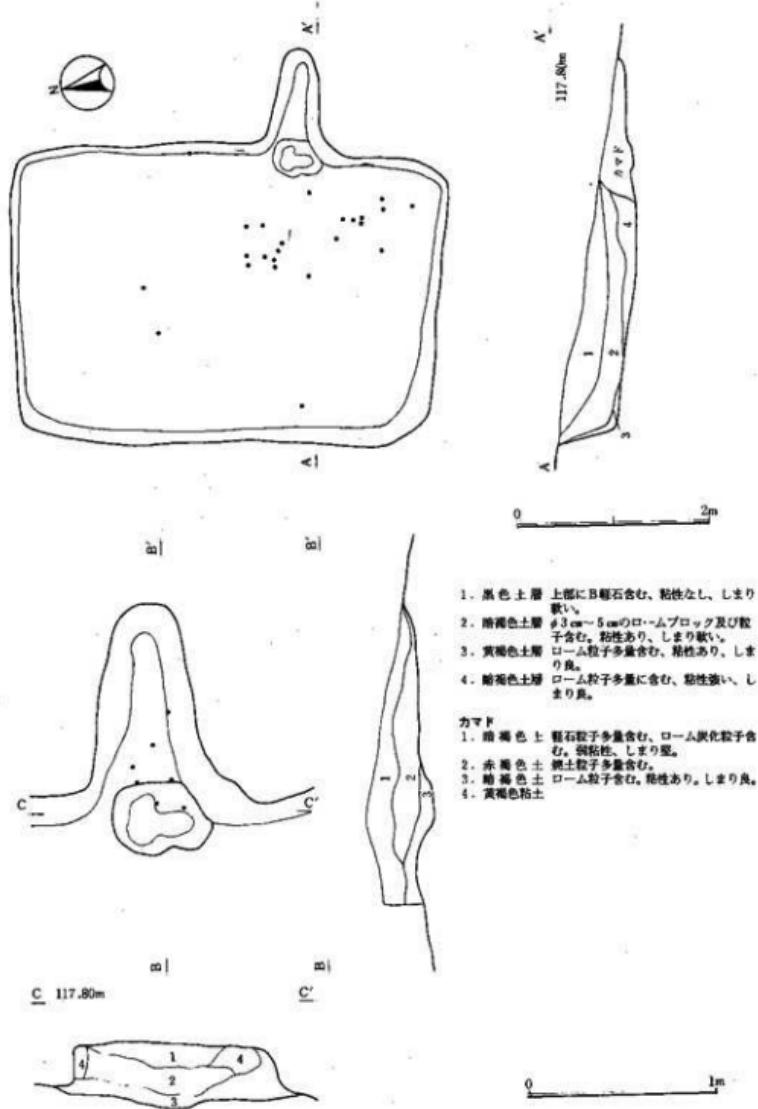
5は須恵器高台付皿である。口径13.8cm、底径7.7cm、器高2.9cmを計る。焼成は還元であるが粗（軟質）。胎土に細かい石粒多量に含む。色調は薄灰褐色である。

6は須恵器高台付皿である。口径は13.7cm、底径6.8cm、器高2.9cmを計る。焼成は還元であるが粗（軟質）。胎土に細かい石粒多量に含む。色調は薄灰褐色である。

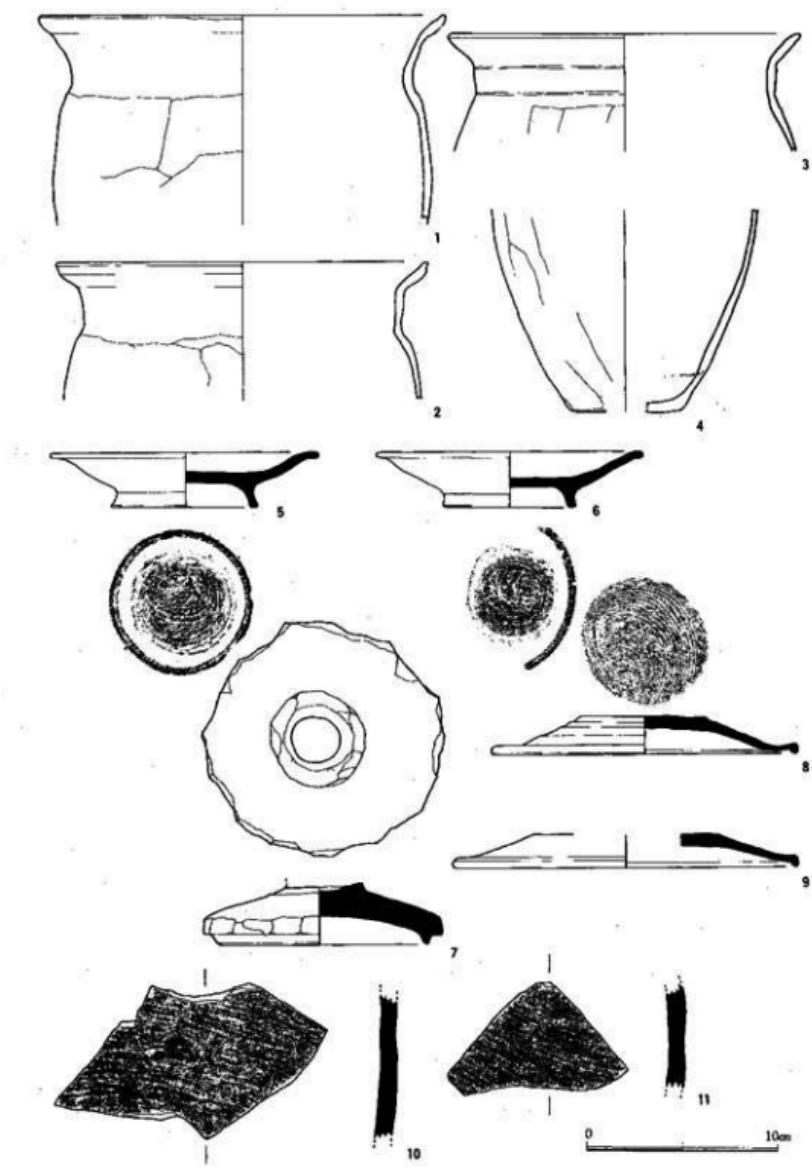
7は須恵器蓋である。残存高は2.8cmを計る。胎土は細かい石粒を含む。焼成は還元。色調は黒灰褐色。外部は回転ヘラケズリを呈する。つまみ部分が破損して、割れ口が摩耗している。

8は須恵器蓋である。口径16.0cm、底径6.7cm、器高2.0cmを計る。焼成は還元。胎土に細かい石粒を多量に含む。色調は濃灰褐色。外部上面回転糸切り無調整。つまみ無し。

9は須恵器蓋である。1/4残存。残存高1.8cmを計る。胎土に粗い石粒を含む。色調は薄灰褐



第8図 3号住居址



第9図 3号住居址の遺物(1)

色。外部上面回転糸切り無調整。

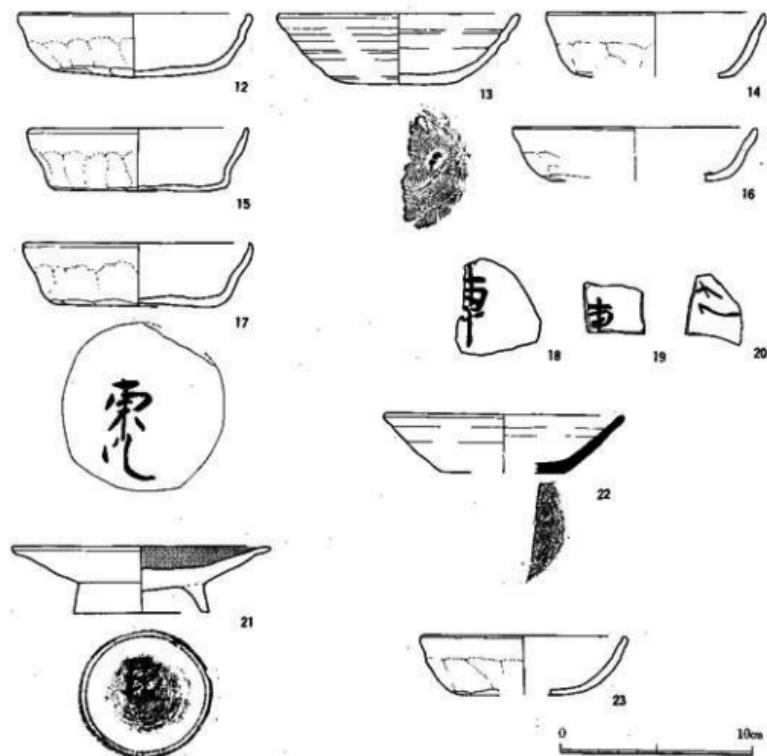
10は須恵器甕胴部破片である。残存高7.6cmを計る。焼成は還元。胎土に細かい石粒を含む。色調は淡灰色である。

11は須恵器甕胴部破片である。残存高5.50cmを計る。焼成は還元。胎土に細かい石英を含む。色調は淡灰色である。

12は土師器壺である。口径12.0cm、底径8.00cm、器高3.35cmを計る。胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。色調褐色。体部指頭圧痕。底部ヘラケズリ。

13は須恵器壺である。口径12.5cm、底径6.0cm、器高3.7cmを計る。胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。色調は茶褐色である。ロクロ成形で回転糸切り無調整。

14は土師器壺である。口径11.4cm、底径8.4cm、器高3.4cmを計る。胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。色調は茶褐色である。調整は底部ヘラケズリ。



第10図 3号住居址の遺物(2)

15は土師器坏である。口径11.4cm、底径8.9cm、器高3.3cmを計る。胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。色調は褐色を呈する。体部指頭圧痕。底部ヘラケズリ。

16は土師器坏である。口径12.5cm、底径6.0cm、器高3.7cmを計る。胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。色調は茶褐色である。調整は底部ヘラケズリ。

17は土師器坏である。墨書き、口径11.9cm、底径8.3cm、器高3.3cmを計る。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。色調は茶褐色である。外面体部下半に指頭圧痕内面より口唇部にかけてナデ底部外面に墨書き。「東院」。

18は土師器坏底部破片である。胎土は砂粒を含む。焼成は良好。色調は茶褐色。外面ヘラケズリ。底部外面に墨書きがある。「車」。

19は土師器坏底部破片である。胎土に砂粒を含む。焼成は良好。色調は茶褐色。外面ヘラケズリ。内面、外面に墨書きしてある。「車」。

20は土師器坏底部破片である。胎土に砂粒を含む。焼成は良好。色調は茶褐色。外面ヘラケズリ。外面に墨書き。「匁院」。

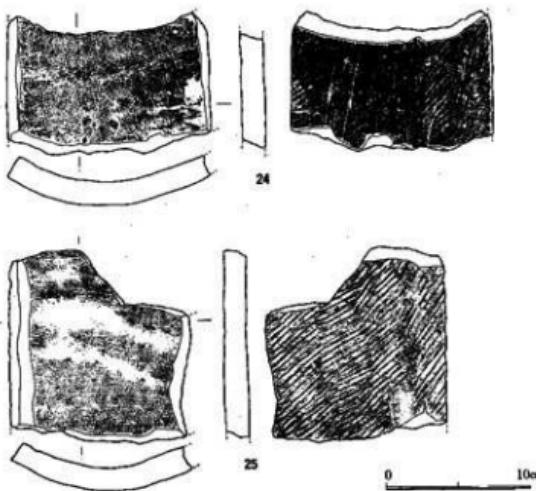
21は土師器高台付皿である。口径13.7cm、台径7.00cm、器高3.25cmを計る。胎土は細かい。焼成は良好である。色調は茶褐色である。外面ナデ、内面ミガキ黒色処理をしている。底部外面に墨書き。「段」。

22は須恵器坏で、口径12.6cm、底径6.2cm、器高10.0cmを計る。底部回転糸切り未調整。

23は土師器坏である。口径10.6cm、底径5.5cm、器高3.1cmを計る。胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。体部指圧痕。底部はヘラケズリ。

24は平瓦である。残存高は7.8cmを計る。焼成は粗。色調は茶褐色を呈する。胎土は砂粒を含む。凹面は布目圧痕を呈し、凸面はタタキをした後ヘラナデで調整している。

25は平瓦である。残存高は14.6cmを計る。焼成は良好。色調は灰。胎土は砂粒を含む。凹面は布目圧痕を呈し、凸面はタタキ目で調整している。



第11図 3号住居址の遺物(3)

2. その他の遺構

今回の調査では、竪穴式住居址以外に土塙と溝状遺構を、それぞれ1つづつ検出している。

1号土塙（第12図）

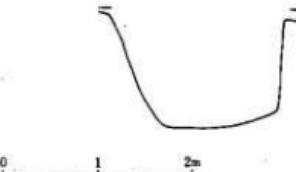
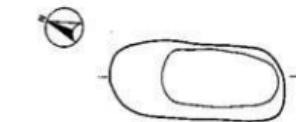
6トレンチの台地の平坦面で検出した。

平面形は長楕円形で、規模は 1.84×0.78 mである。深さは、確認面である軟質ローム層上部から1.15mである。底部は、ほぼ平坦で、壁面は急な勾配で立ち上り、断面形はバケツ形である。

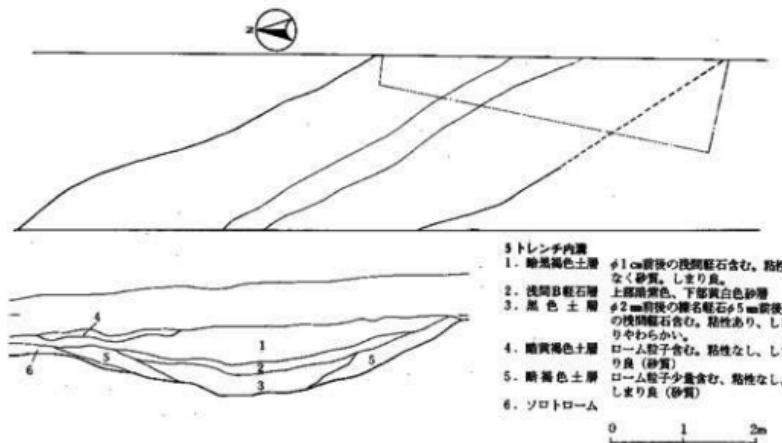
遺物は出土しなかったが、前回の前山遺跡の調査では同じ形態の土塙から縄文時代前期（諸磯a式土器）の土器片が出土しており、本址も同様の性格をもつものと考える。

1号溝状遺構（第13図・図版6）

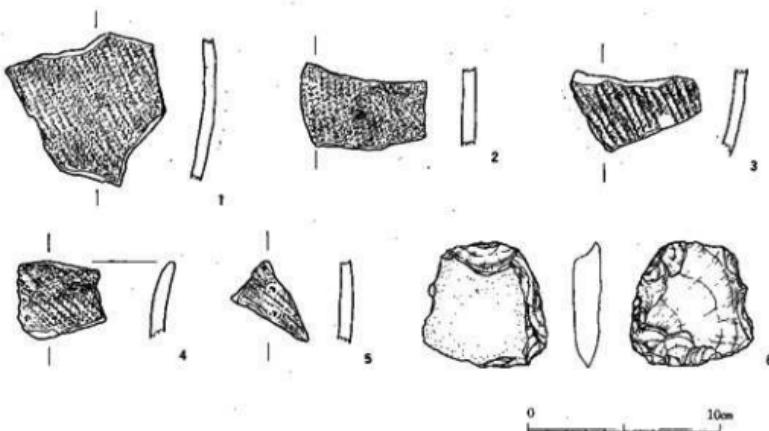
1トレンチ、3～5トレンチで確認された溝状遺構で、北西から南東へほぼ直線的に走行している。上端幅は最大で5.6m、深さは95cmである。覆土上層に浅間B軽石純層が観察された。



第12図 1号土塙



第13図 1号溝状遺構



第14図 調査区内の遺物

溝状造構から遺物は全く出土しなかった。前回の前山遺跡の調査でも覆土上層に浅間B軽石純層が観察された灌漑用とみられる溝が検出されており、本址もそれに関連があるとみられる。

3. 調査区内の遺物（第14図、図版8）

調査区内の表土層中から、僅少ではあるが遺物が採集された。縄文時代前期の遺物がほとんどである。

1は単節斜行縄文 LR を施文している深鉢である。胎土中に纖維を含み、黒浜式に比定される。2は縄文 LR と RL によって羽状縄文をつくりだしている深鉢である。胎土中に纖維を含み、黒浜式に比定される。3は単節斜行縄文 RL を施している深鉢である。胎土中に僅かに纖維を含む。4・5は同一個体と思われ、口縁部はゆるやかな波状を呈する深鉢である。縄文 RL を施して地文とし、縦列に円形竹管文を施す。諸磯 a 式に比定される。6は削器で端部と右側縁部に調整加工が施されている。黒色頁岩製。
（近江屋成陽）

VII. まとめ

本遺跡の調査で堅穴式住居址が3軒、土塙が1基、溝状造構が1条検出された。ここでは遺物が出土した2・3号住居址について、出土遺物を中心にまとめを行ない、今後の資料の蓄積になればと考える。

まず、出土土器から2軒の住居に年代観を与えるべきと思う。2・3号住居址とも非ロクロの箱形の土師器壺が全く同形態で、成・整形の技法も同じことから2軒とも、ほとんど同時期に存在した住居と考えられる。年代観を与える良好な資料として2号住居址出土の灰釉陶器に期待したのだが、高台部分が欠損しているため、決定的な根拠にはならなかったが、口唇部の外反と体部の傾きから光ヶ丘1号窯式^{注1}比定される可能性もある。さらに年代観を与えられそうな他の土器として3号住居址「コ」の字状口縁の土師器壺があげられる。口縁部は胴部に比べて器肉がやや厚く、2のように「コ」の字が明瞭なものと、1のようにややくずれ始めているものもある。また、前述した非ロクロの土師器壺は器肉が薄く、平底で体部は直線的に開くもので、周辺の遺跡^{注2}でも多く報告されている。これらの要素から2軒の住居の実年代は9世紀末から10世紀前葉と考えられる。

2・3号住居址ともカマド袖の芯に瓦を再利用していたが、その瓦はいずれも上西原遺跡の基壇建物跡に伴う瓦と同一のものである^{注3}。上西原遺跡^{注4}は谷ひとつ隔てて対峙する位置に在り、直線距離にして400m程である。機能していた時期は8世紀末から9世紀末と報告されている。

最後に今回の調査で出土した墨書について若干のまとめを行ないたい。文字の種類は2号住居址では「車」「□火」「火」(第6図1)、「車」「東院」(第6図2)、「川」(第6図8)が判読された。尚、2の「車」と「東院」は筆跡が別であると平川南氏より鑑定いただいた。3号住居址では「東院」(第10図17)、「車」(第10図18・19)、「□院」(第10図20)、「段」(第10図21)が判読された。「東院」「□院」は上西原遺跡の方形区画中の基壇をもつ建物に関連する墨書と考える。また、「車」「火」については上西原遺跡では報告されていない墨書であり、上西原遺跡の性格づけの一端を担うものとして興味深い。

注1 田口昭二「美濃窯の灰釉陶器と綠釉陶器」(『考古ジャーナル』No.211 1982)

注2 千田幸生ほか「柳久保遺跡群Ⅱ」昭和63年 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団

注3 松田猛氏より御教示をうける。

注4 松田猛氏ほか「上西原・向原・谷津」昭和61年 群馬県教育委員会

MAEYAMA II SITE

1: Location	1256-1 Izumisawa-town, Maebashi-city, Gunma prefecture and its surrounding.
2: The Objective of Excavation	Research of buried cultural properties for the purpose of improvement of the industrial housing development.
3: Leading Organizations of Research	The Researchers of Excavation of Maebashi-city. The Board of Education of Maebashi-city.
4: Period of Excavation	September 4 — October 9, 1989.
5: Ruins	We found three dwelling sites of Heian period, a ditch of Kofun period and a pit of the first stage of the Jomon period.
6: Remains	Haji ware.....Tsuki (Shallow ware), Kame (pot), Daitsuki-Kame (Pot with stand) Sue ware.....Tsuki (Shallow ware), Kame (pot), Futa (Cover) Kawara (Tile) Jomon earthenware.....Fukabachi(Deep bowl)

CONTENTS

Preface

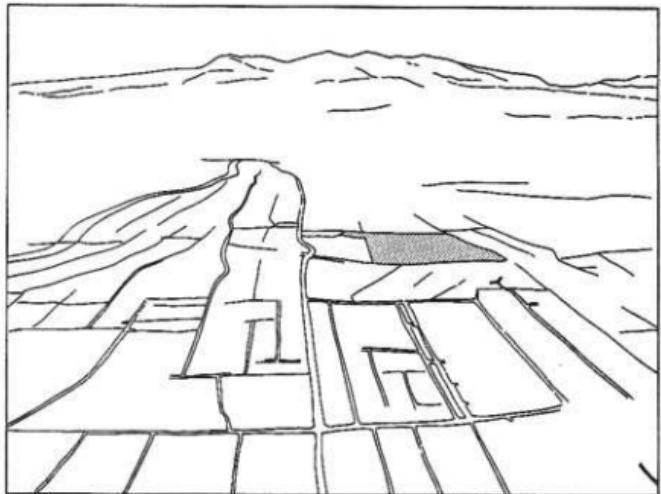
Introductory Notes

I Details of Research	1
II The Organization of Research	1
III A Geographical Position of the Site and Its Surroundings	3
IV The Progress of Research	4
V The Method of Excavation	6
VI Ruins and Remains	7
1: Dwelling sites and those remains	
2: Other ruins	
3: Remains in the site	
VII Conclusion	19

写 真 図 版



南から赤城山を望む

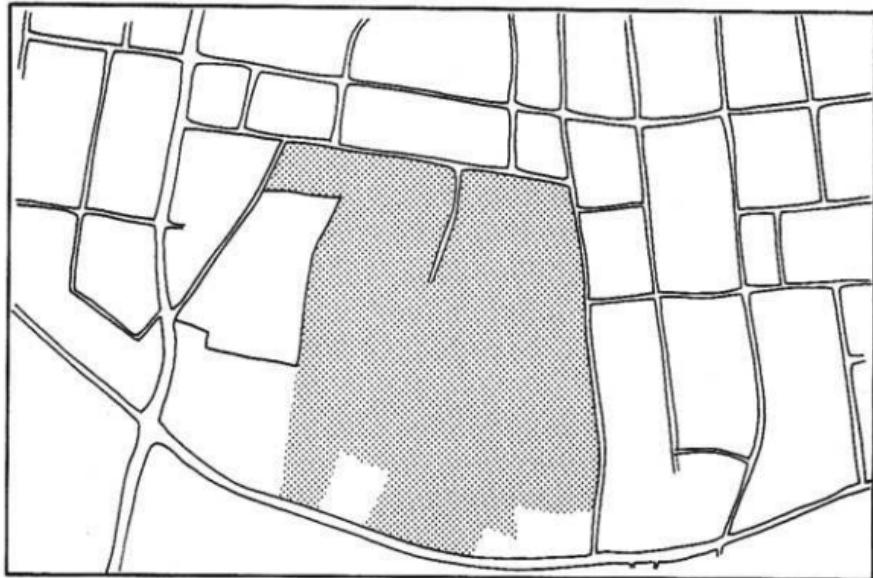


前山II遺跡

図版2



前山Ⅱ遺跡付近の航空撮影



■ 前山Ⅱ遺跡

調査区遠景

(北西から)



調査区西側台地遠景

(東から)



調査区遠景

(南から)



図版4



1. 2号住居跡

調査終了状況（南から）



1. 2号住居跡

調査終了状況（西から）

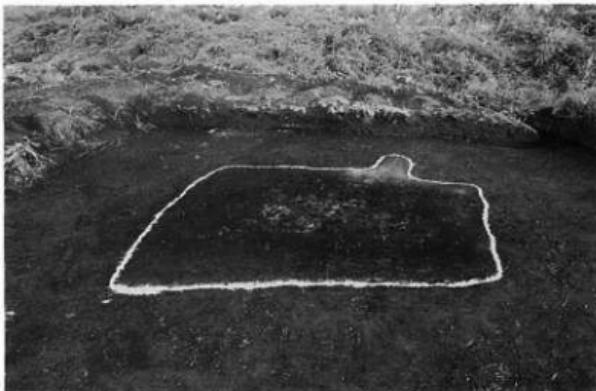


1. 2号住居跡

遺物出土状況（西から）

3号住居跡確認状況

(西から)



3号住居跡遺物出土状況

(西から)



3号住居跡調査終了状況

(西から)



図版 6



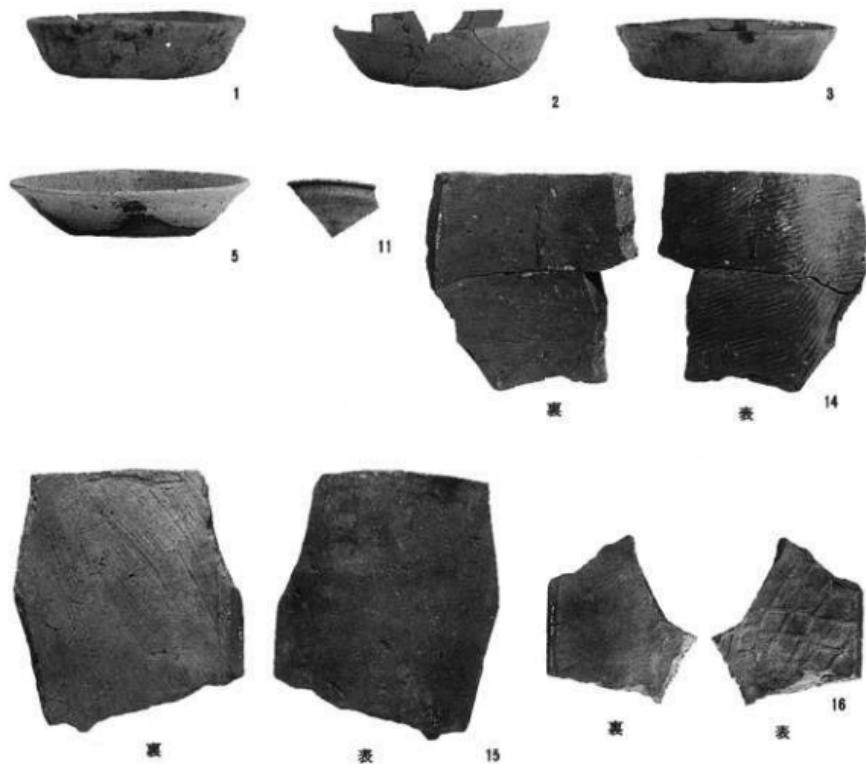
5 (B) トレンチ内・
1号溝調査終了状況
(東から)



4 トレンチ内・
1号溝調査終了状況
(北から)



東側台地11・12トレンチ
調査状況
(西から)

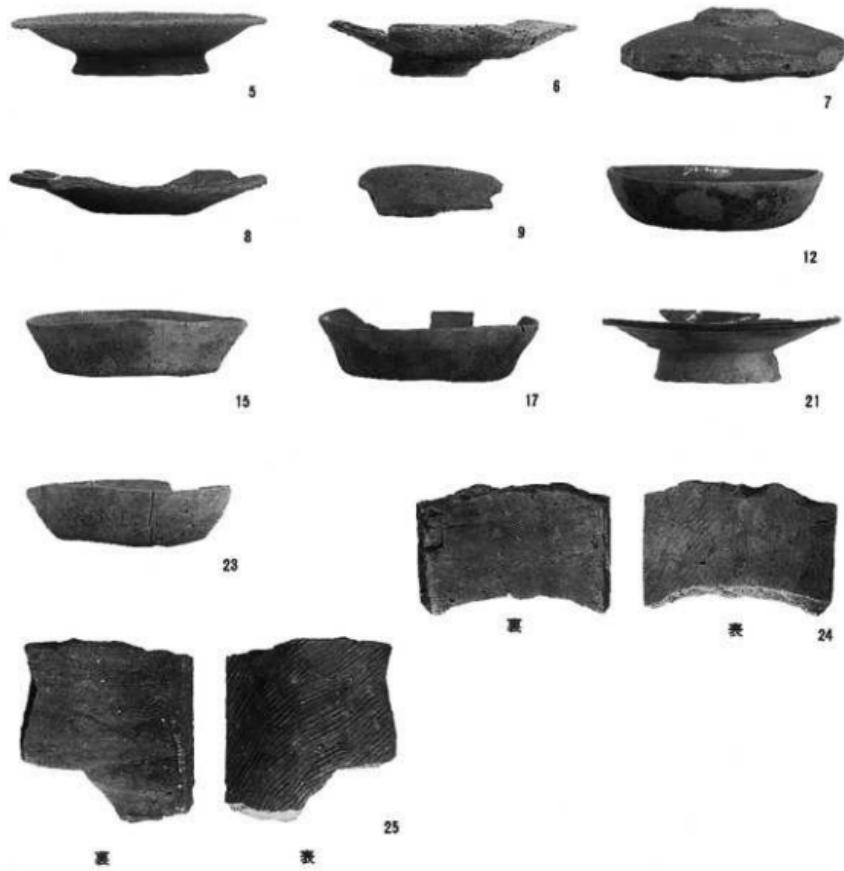


2号住居跡の遺物



3号住居跡の遺物

図版 8



3号住居跡の遺物



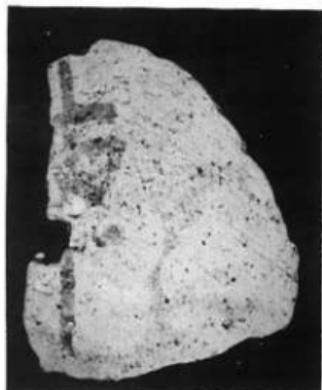
調査区内の遺物



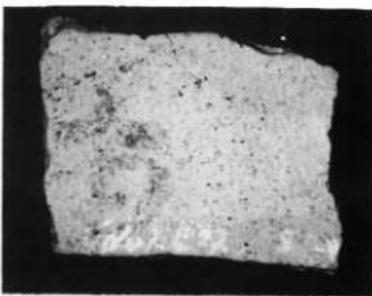
2号住居跡 1



3号住居跡 17



3号住居跡 18



3号住居跡 19



3号住居跡 21



左・拡大

前橋市
前山Ⅱ遺跡

印 刷 平成2年3月20日
発 行 平成2年3月20日

編 集 山武考古学研究所
発 行 前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団
印 刷 (株)文化総合企画
TEL 0476-24-1563

